２０２３年度キャリアデザイン学部

キャリア体験自己推薦入学試験・グローバル体験公募推薦入学試験

小論文 問題

次の文章は、教育学者の神代健彦の著書『「生存競争」教育への反攻』の一部である（表現は、一部変えてある）。よく読んで、以下の二つの問いに答えなさい。

「あれ」がなければ生きていけない、だから苦しくても、もっともっと欲しい、もっと効き目のある、もっとわたしを安心させてくれる、「あれ」を――。まるでチープなテレビドラマに出てくる、極端にデフォルメされた薬物依存症患者のうわごとのようだが、一部の教育家族たち（とはいえそれは、多かれ少なかれわたしたちのことだ）の教育に対する態度はこれと似たようなものだなどと言えば、叱られるだろうか。

それはそうかもしれない。人々が教育をもとめるのは、自分たちの快楽のためというよりは、自分の子どもへの愛情ゆえであるのだから、教育をもとめることをある種の「依存」のように言うのはずいぶんとシニカルにすぎる。しかしそれでもあえて教育を「依存」のメタファーで語る仕方は、わたしたちと教育の関係についての興味深い一側面を照らし出す「異化」の効果をもっている。あえて言ってみよう。わたしたちは「教育依存症」である。わたしたちは、子どもによい教育を与えたい、否、与えなくては不安で仕方がない。いま与えている教育で十分なのか、もっといい教育があるのではないか、そんな底なしの不安。

もう少し正確に言い添えると、この教育依存というアイデアは、わたしたちが経験する現実の教育、特にその主要なものとしての学校教育に、わたしたちがまったく心酔してしまっているとか、その経験が至上の快楽であるとか、そういうことではない。正確に言えばわたしたちは、自分たちの世俗的な幸福を約束してくれる、じつのところいまだ存在しない理想的な教育を欲望している。そして亢進し続ける理想への欲望が、いきおい、現実の学校教育をひどく色あせたものにみせる。「学校は、つねにろくでもない、役に立たない教育を提供している」「すべての人に門戸を開く公立学校は、特にひどい」「極めつけの大いなる「改革」が必要だ」――そのような否定的な感情は、わたしたちの社会のそこかしこで見聞きする、ごくごく一般的な教育語りだ。わたしたちは、教育依存症患者であると同時に、そしてそれゆえに、ひどい学校不信のなかにいる。

とはいえ教育依存／学校不信の症状が深刻なのは、個々の教育家族たちだけではない。結局はわたしたちの社会そのものが、もっとも深刻な教育依存／学校不信症候群の罹患者である。社会にはつねに問題が山積している。格差や貧困はもちろん、さまざまな差別はいまだ根強い。他方で、近い将来あらたな産業革命を迎えると言われるグローバル世界のなかで、日本社会は新しい生き残りの方法を必要としている。だからこの社会で暮らす人々、つまり政治家、財界人、官僚といったリーダーたちから、近所のおじさんやおばさん、職場の上司や同僚など身近な市井の人々に至るまで、そしてもちろん教育家族たちもみんな、教育を欲望している。みんな互いに微妙にすれ違って、ひどく矛盾しながら、にもかかわらず一丸となって、わが子の成功や社会それ自体の治療やエンパワーメントのために、理想の教育を欲望している。そしてその欲望が成就しないことに、つねに絶望し呪詛している。だから日本の学校教育は、明治の創設以来一四〇年以上、休むことなくずっと改革され続けている。

第一問　傍線部「わたしたちの社会そのものが、もっとも深刻な教育依存／学校不信症候群の罹患者である」とは、どういうことか。二〇〇字以内で説明しなさい（縦書き、句読点も字数に含む）。

第二問　私たちは、教育や学校とどう付き合っていけばよいのか。この文章の著者の意見も参考にしつつ、あなた自身の意見を四〇〇字以内で述べなさい（縦書き、句読点も字数に含む）。